

韓少功の手 ——99年1月 於海口——

加藤 三由紀

研究者としての立場を離れ、愛読者としてみると、会ってみたい作家と、そうでない作家とがいる。

たとえば、史鉄生は、初期の若い作も、その後の難解で苦い小説も、最近の、肩の荷を降ろしたような、それでも十分に重い作品も、それぞれのことばが腑に落ち、私にとっては、会わずとも、その文字を追うだけで満足できる、近しい作家である。もちろん、彼に会った人から、思いやり深い優しい人だと聞けば、それはそれで嬉しいのだが。

韓少功は、是非にでも会ってみたい作家だった。八〇年代初めに『西望茅草地』などの情感あふれる小説を書きながら、『文学的二律背反』など、理知的な文学理論を展開しているが、他の中国作家たちが新しい文学理論に筆を染めるのは、それより何年か後のことではなかったか。85年、『爸爸』や『文学的“根”』でルーツ文学に火をつけたかと思うと、87年、後のクンデラブームに先駆けて、『存在の耐えられない軽さ』を訳出。88年には新開地、海口へ移り『海南纪实』を刊行している。ひと味違った「下海」だ。89年『海南纪实』が発禁になり、しばらくニュースが途絶えたが、その後、雑文を執筆しながら『天涯』を編集、96年には『马桥词典』を世に問い、この作品と、それへの評に関する訴訟とで、また大きな話題をよんでいる。作品世界も文体も安定しているのに、なぜかいつも新しい。彼の場合、自作の世界を次々と異化していく力は、開かれたその生き方にあるように思える。

念願かなって、99年1月16日から18日、海口に韓少功を訪れた。

事前に連絡は取っていたが、彼は海南省作家協会主席という重任を担っているし、『天涯』99年第1期の編集も大詰めの時期かもしれない。おまけに、98年12月23日『马桥词典』第二審。出発前にその結果の情報を得られなかったので、どんな状況なのか、訪問が迷惑にならないか、いささか心配しながら、しかし、十数年来の愛読者としては、胸躍らせての出立であった。北京から海口への機内で配られた『海口晚报』（99年1月15日付）の一面の角に、「省作协组织作家采写扶贫工程」の記事があり、彼の名が最初に挙がっていた。

ビル群に囲まれた海口空港を出ると、「KATO MIYUKI」と書いた紙を手に、韓少功が立っていた。丸みを帯びたがっちりした体格に、大きな手。握手をやめて「作揖」を世界に広めようという彼の雑文を読んだことがあるが、この日は分厚い手を差し出し、そしてその大きな手でスーツケースを運んでくれた。かねてお願いしてあった『海南纪实』

の合訂本をいただく。北京図書館(99年2月国家図書館と改称)へ三度足を運んだあげく、「找不到」と閲覧を断られたことは、すでに伝えてあった。名刺も携帯電話も、やはり持っていなかった(韓少功《词语新解》「名片：印上越来越多的职务头衔以强调自己缺乏自信，这一点让他人一见面就知道，而且带走备忘」“便携式电话：时下的一种荣耀，通常表示受他人役使的时间由八小时无偿的扩大至二十四小时”)。何だかほっとする。

翌日、海南省作家協会の車で海口市から1時間ほどのところにある紅樹林(マングローブ密生地)へ案内していただいた。作家協会には二台乗用車があるが、使いたい人が自分で運転することになっている。海南省は、中国で運転手のいない唯一の作家協会とのこと。この日も韓少功の運転である。こちらが子連れなのを気遣って、途中、鹿園によったり、椰子の実を買って下さった。昼に海口市内に戻り、海鮮鍋をごちそうになる。子供が寝てしまったので、海辺の露天の席でなくテントの席を選んだのが、ちょっと残念そう。先日、ロブ・グリエ夫妻が海南島を訪れた時にもこんな海鮮鍋を囲んだが、新鮮なカニやエビを賞賛していたと誇らしげ、家庭では湖南料理だと言うが、すっかり海南島の住人になっている。午後はホテルのラウンジで、ゆっくりコーヒーを飲みながら、二時間あまりお話をうかがった。コーヒーは、91年フランスに四ヶ月滞在したおり、貧しい朝食をなぐさめる友としてなじんで以来、病みつきになったという。酒は飲めない。たまに一服するタバコは紅塔山だった。

18日は、旅程の都合で午前十時までに投宿先のホテルに戻る予定で、『天涯』編集部へ案内してもらった。編集部では、おしゃべりに花が咲き、一時間半があつという間に過ぎてしまった。韓少功は忙しそうに原稿をチェックしていたが、時間だというのに、ぐずぐず写真など撮り始める私をせかして、車に乗せ、ホテルに送り届けてくれた。時計を見たら、十時二分前だった。

以下の記録は、車中での雑談とラウンジでのインタビューとを、まとめたものである。彼の語り口を再現したかったのだが、録音の準備を怠ったのが悔やまれる。*は、記録を整理しながらの感想や補足、飛ばして読んでも差し支えない。なお、韓少功には中国語にした拙文全体に目を通してもらったが、文責は全て加藤にある。

—— 外国語・海外滞在

湖南師範学院中文系在学中に外国語科目として英語を履修、その後、武漢大学で半年「進修生」として集中的に英語を学んだ。英語で日常生活に不自由はない。ただ、講演には、通訳を付けてもらうことにしている、半分休めて楽だから。

海外には、アメリカ、フランスなど。フランスには91年、アカデミーの招請で三ヶ月、さらに地方都市の大学に招かれて一ヶ月過ごした。間もなく韓国へ行く予定、今年中に

韓国で小説集が翻訳、出版されることになっているため。

*彼の海外滞在記や海外での交友記には、英語は当然のこととして、彼の故郷の長沙方言がしばしば織り込まれている。外国語も方言も、共通語を相対化する力を持つ。既成のことばをつき動かし、新しい意味を生む力は、異文化・他言語に身を移して自らのことばをみつめなおす体験に根ざしているのだろうか。湖南を創作の背景にした『馬橋詞典』の後記で、彼にとっては外国語に等しい「海南話」との出会いが語られていることも納得がいく。

—— 長沙から海口へ ——

招請されて海口へ移ったのは88年、この気候と、人間が少ないのが気に入ったから。当時は飛行場付近もビルなどなく椰子の並木が続いていた。今でも、海南島は人口600万、人っ子一人すまぬ荒野がかなり残っている。

*一家をあげての移住は何かを決意してのことに違いない。『海南紀実』の発刊が目的だったのだろうか。海南島での思いは、「南方的自由」「阳台上的遺憾」「海念」などの散文に綴られている。

—— 『海南紀実』（《HAINAN REBIEW》88年11月～89年9月） ——

発禁になった直接の理由は、上海の『世界经济报导』がらみの記事（89年6月号鄭重「『世界经济报导』の前前后后」）を載せたから。そもそも雑誌全体の基調が当局には気に入らなかったに違いない。通知には、あと三号、89年12月号まで刊行してよいとあった。当時、『海南紀実』は一号出すと五〇万元の利益があり、五〇万元×三号分の金で編集者の生活改善を図ることもできたが、そのような状態に出せる記事は限られる。決まりきった論調にあわせるのはいやだから、あっさり9月でやめた。停刊のことばも、読者に別れを告げるだけの簡単なもの。当局の目には、これも反抗的な態度に映ったようだ。海南省のいいところは、政治家が文化人ぶって口出ししないこと。フランス行も、中央の中国作家協会を通してではなく、地方政府で手続きをとった。手続きは順調、監視役などつけずに、一人で送り出してくれたことに感謝している。

*発行部数が百万部を突破したというこの雑誌は、今も暴露雑誌として人々に記憶されている。真面目な記事ばかりだが、ショッキングな写真が掲載され、どぎつい感じの雑誌である。文学雑誌の色合いはほとんどないが、蔣子龍、従維熙、戴晴、莫応豊、汪曾祺の散文がみえる。知識青年、上山下郷関連の記事が多く、編集部年代、読者層を伺わせる。

—— 海南省作家協会主席 ——

実務は96年から始めたが、正式には97年から。会員二百名余り、専従職員はたった十数名、虚飾は極力排する主義で仕事をしている。作家協会は銀行のビルの一角に入っている。社交は嫌い、経費もかかるから、北京をはじめ各地での催しには、滅多に参加しない。会議も、挨拶して、上っ面の人間関係をつくって、観光して終わり、時間の無駄。

—— 『天涯』（《Frontiers》96年改版～現在） ——

思うところを記した雑文を書いてきたが、自分が発言するだけでは声にならないので、雑誌編集という形にきりかえた。『天涯』は、もともと海南省の地方雑誌、それを刷新した。その際、『海南纪实』の件があるので、あまり目立たないよう、「改版」の辞などは載せなかった。毎号、巻頭言もない。そもそも、雑誌はスローガンで売るものではない、実質を大切にしたい。

重視しているのは「作家立場」(WRITERS' POSITION)欄。読者の反応もよい。ここでいう作家とは、中国古来の意味、「文章」を書く人、Writer。狭い意味での文学者ではない。この欄で、「人文精神」「現代化(実は、資本主義)」をテーマにしてきた。今、中国の多くの編集者は雑誌でいい加減に口すすぎをしているだけ。編集者に問題意識がなければ、雑誌をやる意味がない。

もう一つ、読者に人気があるのは「民間语言」(POPULAR VOCABULARY LITERATURE)欄。「民間」ということばは、陳思和のいう、「官方」との対立というコンテクストで使っているのではない。「文壇」、「狭義の文学」の対義語として選んだ。現在のサブカルチャーは、工業化されたもので、数年で消費される。そうではない「民間语言」を守る立場に、知識人は立たされている。

発行部数は二万部から、今では三万部に近い。他の雑誌のように企業広告をとらないのは、発行量が少ないので企業の側から依頼がなく、かといって、編集者に広告取りのノルマを課すのはいやだから。編集部には編集に専念して欲しい。装丁は97年から深圳のデザイナーに依頼、評判がよい。読者の目を引くために、食前酒の役割を果たす「一図多義」を巻頭に据えている。読者には農民も労働者もいて、読者からの便りには、非常にレベルの高いものがある。それを見ると、学歴と理解度は関係ないことがよくわかる。

この雑誌に載せたなかで印象深い作は、汪暉、南帆の文章と、小説「誓与圓圍巨人斗争到底」。汪暉の論文は大きな反響を呼んだ。南帆は優れた批評家。小説は稚拙なところがあるが、子供が食料の山に恐れを抱くという着想は、展開するに足るものとする。

* 『天涯』は海南省作家協会の雑誌で、社長は韓少功、主編はやはり湖南から

移ってきた蔣子丹。96年はとても好感の持てる装丁ではなかったが、97年からは外見も中国らしい篆刻・版面にアルファベットを配するモダンな雑誌に変身した。全国に八百以上ある文学雑誌の発行部数は、平均三千部程度。『小説月報』が三十二万部と飛び抜けているが、文学雑誌の危機が叫ばれるなかで発行部数三万部はかなり健闘している。『天涯』編集部も誇りを持って仕事をしている明るい雰囲気にも包まれていた。「它的成功是以牺牲文学为代价的。(中略)实际上已变成了一个文化型刊物(《文艺报》98-10-31)」というように、文学作品は質も量も高くはない。文学雑誌というよりは人文系の総合雑誌である。もっとも、蔣子丹によれば、それこそが文学であり、「文史哲不分家」「恢复中国文化杂文学传统(ともに《北京晚报》98-10-14)」ということになる。99年から文字部分のみ、インターネット(www.hk.hi.cn)で閲覧できるようになった。(99年第3期中止)

『馬橋詞典』と訴訟

『爸爸』とは異なり、作中で読解もしているのだから、わかりやすい作だろう。作家出版社、上海文芸出版社のほか、香港、台湾でも出版された。台湾版では、かなりの誤字を訂正した。裁判が話題になっているが、文壇ゴロ(文芸界のごろつき)に対処したまで。論拠なく言いつばなしの無責任な批評があまりに多い。文学関係の雑誌や新聞でも、作家のゴシップを“暴き”、意味のないけんかをしかける興味本位の報道が目立つ。それに一々反論する暇もないので、今回、法廷に持ち込んだ。法廷では証拠を要求される。たとえば、『馬橋詞典』についての批評は仲間内の宣伝だという王干の言に反論するため、『馬橋詞典』をとりあげた批評家ひとりひとりに連絡を取り、それぞれに自分との関係を文書にして、証拠として裁判所に提出してもらった。多くの人がそれまで交流のなかった人だった。それに対して、被告たちは、自らの言論に何の論拠も示せない。第二審は、王干の件の最終文書だけがまだ降りてきていないが、他は一審と同じ判決が出た。

*台湾の『聯合報』97年度最佳書賞、『中国時報』97年度十大好書賞、上海第四屆長中編小説優秀作品一等賞を受賞。馬橋訴訟については、研究者の間では、張氏、王氏の批評には理がないが法廷に持ち込むべき問題ではないとする人が、圧倒的に多い。この裁判は、人文精神論争の続きだとみる人もいれば、張氏・王氏の評論は、下郷世代に対して下の世代がかみついたのだという人もいる。ともあれ、劉震雲が思想改造につとめて長編『故郷面和花朵』のダイジェスト版を出すことに同意したなどといった、興味本位の無責任誤報道には、目に余るものがある。

— 今の中国社会 —

中国でも、アメリカ式の資本主義社会を実現できる、豊かな消費生活を享受できると宣伝する人がいるが、それは人を欺く悪質な騙りだ。中国はヨーロッパやアメリカとは違う。余所から資源を持ってくるわけにいかないし、失業人口が他地域へ移動することもできない。そして、「官」、中産階級から底辺の労働者まで、同じ土地に暮らさなければならぬ。革命が起こる可能性は、他地域よりも高いと言わざるを得ないだろう。革命には、破壊がつきもの、まず破壊されるのは文化だ。言うまでもなく、知識人はそれを望んでいない。今、発展という概念そのものを疑わなければならない時が来ている。

* 『天涯』にもよく登場する経済学者、何清漣の『現代化的陷阱』を読んでの感想——激震を伴う社会変動を経ず、穏やかに新しい社会へ移行するようという、知識人の切実な願い(=激震への恐れ)を感じた——に、答えてもらった。

『現代化的陷阱』(98年1月今日中国出版社)は、権力がらみの市場経済によるあくなき経済効率追求が、結局は国民の富を損ない、国全体の経済的貧困を招くことを実証し、人文精神と公正を尊び、持続可能な社会をめざすよう訴えて、ベストセラーになった。この本の後記には、韓少功への謝辞も記されている。

— これからの仕事 —

作家協会や編集の雑務で時間が細切れになり、創作に専念できないから、主席の任期が切れたら、ライフスタイルを変えるつもり。当然、『天涯』とも距離を置くことになる。編集の仕事は、好きでやっているわけではないのだから。村の暮らしが好きだから、半年は湖南の汨羅に建てた別荘で山羊を飼い、半年は温暖な海口ですごしたい。創作は、ことばの外のもの、人間の身体性にかんする長編を書きたい。

* 『中华读书报』99-1-27によれば、ペソア(F. Pessoa、费尔南多・佩索阿)の散文集『惶然集』(“The Book Of Disquiet”)を翻訳、出版の予定(上海文芸出版社)。

実質一日の短い訪問では、海口の「天子の威厳や官府の陣構えを示すにははなはだ不便な、しかし、神話や巫術、反逆を潜めるのには好都合な、曲がりくねった路(「陽台上的遺憾」)」を体感する間もなかったが、せわしなく窮屈な北京では味わえない解放感を、海口の韓少功は与えてくれた。それにしても、ようやく現在形の韓少功に会えたと思ったのに、もう、彼自身は、一歩先にいる。創作の拠点を湖南の農村に移し、現代社会での新しい自由な生き方をみせてくれるだろう。生活と仕事を選び取る勇気と実行力

に脱帽。

今、思い起こしてみると、なぜか彼の顔は浮かばず、大きくて分厚い手ばかりがクローズアップされて現れる。空港で差し出された手、ハンドルを握る手、そして『天涯』編集部での(この時は眼鏡をかけていた)原稿を持った手。「实干家」(現実を直視して着実に仕事をこなす人)と呼んでは、作家にたいして失礼だろうか。

次には、湖南で山羊の乳を搾る手に会いたい。

最後に本会報12号「部分作家問詢」と同じ質問への答えを記録しておく。

笔名	无
本名	韩少功
生年月日	1953年1月1日(公历)
生地	湖南省长沙市
现在你最注目的作家	
外国作家	卡夫卡 米兰·昆德拉 F. Pessoa Gunter Grass
中国作家	苏轼 鲁迅 史铁生 张承志
自己作品里最喜欢的是哪一篇？	《爸爸爸》
你最喜欢的作家、作品	跟最注目的作家一样



『天涯』編集部 中央：韓少功、ショートカットの女性：蒋子丹